

言語A－言語と文学コース(日本語)

コースの概要(SL/HL)2022-2024

■言語A－言語と文学コースとは

このコースでは、生徒はさまざまな媒体を通して広い範囲の文学と非文学テキストを学びます。適切な副読教材とともに、さまざまな文学形式とテキストタイプがどのようなコミュニケーション上の役割を担っているかを研究することで、言語そのものの特性、また言語がアイデンティティーや文化にどのように影響されるかについて学びを深めます。このコースの学習のアプローチは広い範囲におよび、文学理論、社会言語学、メディア研究、批判的言説(クリティカルディスコース)分析などを含みます。

■言語A－言語と文学コースの学習のねらい

「言語と文学」のすべての科目はいずれも、以下を学習のねらいとしています。

1. さまざまな媒体や形式、異なる時代、スタイル(文体)、文化からの多様なテキストに触れる
2. 話す、読む、書く、見る、発表する、およびパフォーマンスのスキルを伸ばす
3. 解釈や分析、評価のスキルを伸ばす
4. テキストのフォーマルで美的な性質への感性を磨き、またそれらがどう多様な応答や複数の意味をもたらすのかを鑑賞できるようになる
5. テキストと多様な価値観、文化的文脈、地域とグローバルな問題との関わりについて理解を深め、またそれらがどう多様な応答や複数の意味をもたらすのかを鑑賞できるようになる
6. 「言語と文学」と他の教科の関係性への理解を深める
7. 自信をもち、創造的な方法でコミュニケーションをとり、協働する
8. 言語と文学に対して、生涯にわたって関心と喜びをもつように促す

■評価目標

知識、理解、解釈:

- ・多様なテキスト、作品、およびパフォーマンス、それらの意味と含意
- ・テキストが書かれた文脈とまた受けとられる文脈
- ・文学的、文体的、修辭的、視覚的、そしてパフォーマンス技術的な要素
- ・テキストタイプと文学形式の特徴

分析と評価

- ・言語の使い方がどう意味を生成するか
- ・文学的、文体的、修辭的、視覚的、また演劇技術の使用法と効果
- ・さまざまなテキスト間の関係性
- ・人間が抱える問題に対して、テキストがどのような見解をもたらしているか

コミュニケーション

- ・明確で論理的、説得力のある方法で考えを表現する
- ・さまざまなスタイルや言語使用域(レジスター)を用い、多様な目的と状況に応じて表現する

■シラバスの概要

読者、作者、テキスト(SL 50h/HL 80h)

非文学テキストをたくさんの資料やメディアから選び、できるだけ多様なテキストタイプが含まれるようにします。作品はさまざまな文学形式から選ばれます。非文学テキストと作品の学習では、言語とコミュニケーションの特性、文学の特性、およびそれらの研究に焦点をあてます。テキストそのものがどのように作用するか、また、創作と受容の文脈と複雑さについても研究します。コミュニケーションの細部について、個人的な応答と批評を展開することに焦点をあてます。

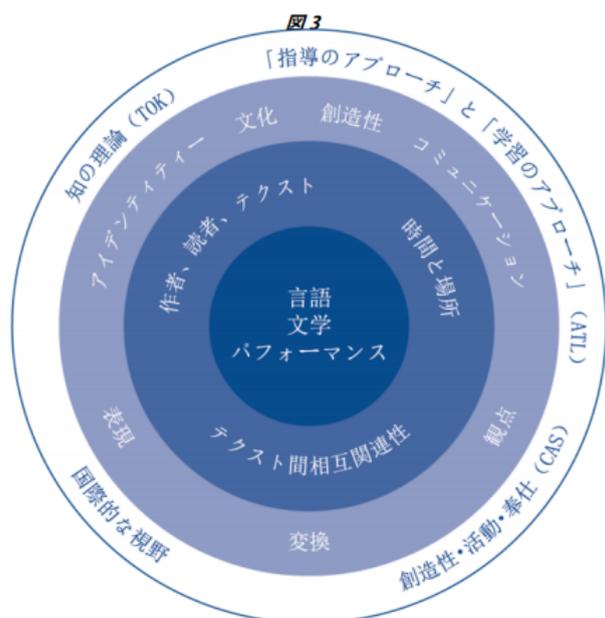
時間と空間(SL 50h/HL 80h)

非文学テキストと文学作品をさまざまな資料やメディアから選びますが、これらは多様な歴史的、文化的観点を反映しています。学習では言語が使用される文脈と、文学テキストと非文学テキストがどちらも社会全般を反映し社会を形づくるさまざまな方法に焦点をあてます。個人的観点および文化的観点を考慮する、より広い観点を培う、文脈が意味につながる過程に意識を向けることに焦点をあてます。

テキスト間相互関連性:テキストをつなげる(SL 50h/HL 80h)

学習を深め、有意義な比較ができるように、たくさんの資料、文学形式、メディアから非文学テキストと文学作品を選択します。これらの学習では、コースを通して学んできた多様なトピック、テーマに関する問題、一般的手法、伝達様式(モード)、文学的伝統などを探究しながら、テキスト間相互関連性に焦点をあてます。テキスト間の複雑な関係性の理解に基づいた批評を発展させることに焦点が置かれます。

■「言語と文学」の学習のモデル



この全3コースの中心には、言語、文学、パフォーマンスの領域があります。これらの要素が強調される度合いは各コースで異なりますが、どのコースにおいても多かれ少なかれ取り扱います。

言語、文学、パフォーマンスの学習、および関連スキルの発達には3つの探究領域に分かれています。1) 読者、作者、テキストの相互作用の本質についての探究、2) テキストが時間と空間にどう関わるかについての探究、3) テキスト間相互関連性についての探究とテキスト間にどのようなつながりがあるのかについての探究、となっています。これらの3つの領域はコースが進むにつれ順を追ったアプローチとなるように見えますが、図に示されるように、これらの領域には重複している部分も多く、反復的つまり循環的であるため、柔軟にコースデザインができます。

■「言語と文学」のコースにおける概念的理解

「言語と文学」のコースでは、概念が非常に大切です。3つの探究領域にまたがってテキストの学習を組織的に導くものだからです。概念は3つの探究領域に多岐にわたり関連しており、1つの領域から別の領域への移行に継続性をもたらします。またテキスト間を関連づけ、学習したテキスト間がどのように関係するのかを特定しやすくなります。特に評価要素に基づく評価があるわけではありませんが、概念は生徒の研究の重要な部分となっており、したがって各学習テキストのディスカッションでとりあげるべきです。

コースの指導と学習を形作る7つの概念は、「言語と文学」のどのコースにおいても中心的な役割を果たすことから選ばれました。これらの概念は言語と文学の学習の中核をなすもので、注意すべき点でもあり探究の焦点にもなってきました。7つの概念の簡単な説明は以下の通りです。これらの説明は総括的なものではありませんが、コースの考え方を支える手引きとなります。

クラスの活動を通してこれらの概念にどのようにアプローチするかの方針については、本資料または「言語 A」TSM の『「言語と文学」における「指導のアプローチ」と ATL』のセクションを参照してください。

アイデンティティー

テキストを読むとき、生徒はさまざまな観点、ヴォイス（語り手や登場人物の考え方や話し方の特徴）、登場人物に出会い、関わります。テキストを読み、解釈しているときに、そこに表現される観点は作者のアイデンティティーをある程度反映するものであると仮定するのが普通です。しかし、作者の経歴とテキストにおけるさまざまな観点やヴォイスの関係は複雑であることが多く、アイデンティティーの概念はわかりにくいものです。同じ作者による色々なテキストを読むことで浮かび上がる人物像もまた、ディスカッションを複雑にするものです。また逆に、テキストを読むときの読者のアイデンティティーの関わり方も、読解という行為を分析するにあたって同じくらい的重要性をもちます。

文化

文化の概念は、「言語と文学」の核をなします。文化の概念によって、テキストが、その創作と受容の文脈にどう関わるか、またテキスト中にあらわれるそれぞれの価値観、信念、態度とどう関わるかという問いが生まれます。この概念は個々のテキストと、それ以前の記述の慣習との関係性についても大切な役割を果たします。文化の概念をテキストの学習に適用することで、テキストはある特定の文化的、文学的文脈の産物であり、それらがどのように関わりあっているかという振り返りにもつながります。

創造性

創造性は読む、書くという経験において重要な要素です。この概念は書くという行為、そして想像力が果たす役割を分析し理解するための基盤となります。読むという行為にあてはめた場合、創造性は、読者がテキストと想像的に関わり、そこから既存の解釈を超えた潜在的な意味を新たに生成するという重要性に気づかせてくれます。創造性はまた、独創性についての考え方や、テキストが創作され受け入れられるときに独創性がどの程度重要になるかという問いにも関わります。

コミュニケーション

コミュニケーションの概念はテキストという手段を介した作者と読者の関係性に関する問いにまつわるものです。作者が選択したスタイルや構成がコミュニケーションをどの程度円滑にするかという点は、本探究で分析する側面となりえます。作者は特定の読者を想定していることもあります。それはつまり、読者の知識や観点について作者が仮説を立てているということであり、これにより、他の人に比べ、一部の読者とのコミュニケーションが容易になることもあります。また、コミュニケーションを実現するためにテキストが読者に求める協力の度合い、読者がコミュニケーションに関わろうとする心構えもディスカッションの重要なトピックになります。協力的な読者を得た時であっても、テキストの意味は決して一律ではありません。そのためコミュニケーションの概念は、文学テキストと非文学テキストのどちらに関しても特に生産的な概念であり、かつ問題を生じさせる可能性のある概念でもあります。

観点

テキストは複数の観点をあらわす場合があります、そこに作者の見解が反映されていることもあれば、されていないこともあります。読者もまた自分自身の観点をもってテキストと関わります。このようにさまざまな観点がテキストの解釈に影響を及ぼすため、批判的な見方とディスカッションが必要になります。読む、または書くという行為がある特定の時間と場所で起こるという事実は、テキストが創作され受け入れられた文脈がどの程度そういった観点到に影響を及ぼし、形づくってきたかという新たな問いを投げかけます。

変換

テキスト間のつながりに関する学習では、3つの探究領域のうちの1つ、つまり「テキスト間相互関連性:テキストをつなげる」に焦点をあてます。テキストが互いに参照しあい、要素を充当しあい、さまざまな美的目的あるいはコミュニケーション目的に合うよう変換する複雑な方法は、テキストを創作する過程における変換の重要性を示すものです。また、読むという行為自体も、潜在的にテキストや読者に変化をもたらすものです。読者によって個人的な解釈が異なり、テキストを変換させていきます。一方、テキストもまた読者に影響を及ぼし、そこから行動へ、そして現実の変革へとつながっていく可能性もあります。

表現

言語と文学の現実との関わり方は、言語学や文学理論の研究者の間で長い間論争の的となってきました。作者の発言や記述をもとに、現実との関わり方についてさまざまな主張がされてきました。文学は現実をできるだけ正確に表すべきであるといった主張から、芸術は現実からも、作品の中で現実を表現すべきという義務からも完全に切り離され自由でなければならない、という主張もあります。このような議論にかかわらず、表現の概念は形式や構成が意味とどのように交わり関わるかということに関連して、本科目の中核となるものです。

■評価の基準

SL

*外部評価(3 時間) 70%

•試験問題 1:設問つきテキスト分析(1 時間 15 分)

試験問題は 2 つのテキストタイプを代表する 2 つの非文学テキストから成り、それぞれに 1 問ずつ設問があります。生徒は課題文の 1 つを選択し、分析を書きます。

•試験問題 2:比較小論文(1 時間 45 分)

試験問題は、4 つの一般的な質問で構成されます。このうちの 1 問につきコースで学習した 2 つの作品に基づいて比較小論文を書きます。

*内部評価 30%

この要素は個人口述から成り、内部評価は学校内の教師が行い、コース修了時に IB が外部モデレーションを行います。

•個人口述(15 分)

非文学テキスト 1 つ、文学作品からの抜粋 1 つを利用して、生徒はあらかじめ用意した回答を 10 分間で発表し、その後 5 分間、教師から次のテーマに基づいた質問をされます。自分で選んだグローバルな問題が、学習した 2 つのテキストの内容と形式を通してどのように表現されているか分析しなさい。

HL

*外部評価(4 時間) 80%

•試験問題 1:設問つきテキスト分析(2 時間 15 分)

試験問題は 2 つのテキストタイプを代表する 2 つの非文学テキストから成り、それぞれに 1 問ずつ設問があります。それぞれについて分析を書きます。

•試験問題 2:比較小論文(1 時間 45 分)

試験問題は、4 つの一般的な質問で構成されます。このうちの 1 問について、コースで学習した 2 つの作品に基づいて比較小論文を書きます。

•HL 小論文

非文学テキスト 1 つ、同じ作家による一連の非文学テキスト、あるいはコースで学習した文学テキストまたは作品について小論文を書きます。小論文は、1200 語から 1500 語(日本語の場合は2400 字から 3000 字)です。

*内部評価 20%

•個人口述(15 分)

この要素は個人口述から成り、内部評価は学校内の教師が行い、コース修了時に IB が外部モデレーションを行います。非文学テキスト 1 つと、文学作品 1 つからの抜粋を元に、生徒はあらかじめ用意した回答を 10 分間で発表し、その後に教師から 5 分間、次のテーマに基づいた質問があります。自分で選んだグローバルな問題が、学習した 2 つの作品の内容と形式を通してどのように表現されているか分析しなさい。

■2022年度日本語A:言語と文学コースで学習予定の作品

	SL	HL
指定作品リストにある作家の翻訳作品	HLの本から1冊を選ぶ *ただし、ここで戯曲を選んだ場合はもう一方で小説を選ぶこと	戯曲 『ピグマリオン』 バーナード・ショー
		小説 『史記』司馬遷
指定作品リストにある作家の学習している言語で書かれた作品	HLの本から1冊を選ぶ *ただし、ここで戯曲を選んだ場合はもう一方で小説を選ぶこと	戯曲 『夕鶴』木下順二
		小説 『雨月物語』上田秋成
自由選択作品	随筆 『日本の面影』小泉八雲	随筆 『日本の面影』小泉八雲
	詩歌 『万葉集』柿本人麻呂他	詩歌 『万葉集』柿本人麻呂他

■SLとHLの違い

「言語 A: 言語と文学」の構成は SL と HL とで共通ですが、両レベルの間にはかなりの量的かつ質的な違いがあります。

SL の生徒は、4 つの文学作品に加え、授業学習時間に可能なかぎり多くの非文学テキストについて学びます。HL の生徒は、6 つの文学作品に加え、授業学習時間に可能なかぎり多くの非文学テキストについて学びます。

試験問題 1 は、SL、HL とともに、初めて読む 2 つの非文学作品の抜粋や非文学テキストをさまざまなテキストタイプから出題したもので、それぞれに考察を促す問い(ガイディングクエスチョン)があります。SL の生徒はそのうちの 1 つについて設問に対する分析を書きますが、HL の生徒は両方について分析を書かなければなりません。

また、HL の生徒には 4 つ目の評価要素として HL 小論文(HL エッセイ)、つまり学習した非文学テキストまたはテキスト、あるいは文学テキストまたは作品に関連した探究の筋道に取り組む記述課題が課せられます。この探究について 1200 から 1500 語(日本語の場合は 2400 字から 3000 字)の小論文を書き、HL の生徒は言語研究または文学研究の本質についてより深い理解を示す必要があります。

■文学作品の選択

SL の生徒は次の最低 4 つの作品を学びます。

- 学習している言語で原作が書かれた、PRL に載っている作家の作品を最低 1 つシラバスの内容
- PRL に載っている作家の翻訳作品を最低 1 つ
- 2 つは PRL からでもそれ以外からでも自由に選択することができ、翻訳作品も可。
- それぞれの探究領域で最低 1 つの作品を選ぶこと。作品は 2 つの文学形式を含み、PRL で
- 定義されている 2 つの時代と 2 つの場所、最低 2 つの大陸を含んでいること。

HL の生徒は次にあてはまる最低 6 つの作品を学びます。

- 学習している言語で原作が書かれた、PRL に載っている作家の作品を最低 2 つ
- PRL に載っている作家の翻訳作品を最低 2 つ
- 2 つは PRL からでもそれ以外からでも自由に選択することができ、翻訳作品も可。
- それぞれの探究領域で最低 2 つの作品を選ぶこと。作品は 3 つの文学形式を含み、PRL で
- 定義されている 3 つの時代と 3 つの場所、最低 2 つの大陸を含んでいること

■非文学テキストの選択

以下の非文学テキストタイプの一覧は、コースの構成を助け、多様性と探究を深めるのに役立つためのものです。このリストは完全なものではなく、生徒はこれらすべての特徴や性質を学習することを期待されている訳ではありません。あるテキストタイプを分析するスキルを他の作品にも応用することができます。

教師は、それぞれの領域あるいはコース全体で、非文学テキストと文学作品の学習に費やされる時間がバランス良くなるようにします。

表 1
教師のコース構築に役立つテキストタイプ一覧

広告	百科事典の項目	パロディー*
陳情文	映画、テレビ	パステーション (模倣作) *
伝記*	ガイドブック	写真
ブログ	インフォグラフィック	ラジオ放送
パンフレット、チラシ	インタビュー	レポート
漫画	手紙 (フォーマル) *	脚本
図解	手紙 (インフォーマル) *	説明文
日記*	雑誌記事	スピーチ*
電子テキスト	宣誓書*	教科書
エッセイ*	回顧録*	旅行記*

■評価基準

外部評価規準

試験問題 1: 設問つきテキスト分析

SL、HL ともに 4 つの評価規準があります

規準 A	理解と解釈
規準 B	分析と評価
規準 C	焦点と構成
規準 D	言語

試験問題 2: 比較小論文

SL では、4 つの評価規準があります。

規準 A	知識、理解、解釈
規準 B	分析と評価
規準 C	焦点と構成
規準 D	言語

HL小論文

HL では、以下の 4 つの評価規準があります。

規準 A	知識、理解、解釈
規準 B	分析と評価
規準 C	焦点、構成、展開
規準 D	言語

内部評価規準

個人口述

4 つの評価規準があります。

規準 A	知識、理解、解釈
規準 B	分析と評価
規準 C	焦点、構成、展開
規準 D	言語

